

1970年代から各時代の変遷を踏まえて展開を図ってきた。現在の気候変動対策といった課題に対してもそれは同様である。しかし、これらの課題に応じた事業の展開においても、その基本は「自然環境の維持と人間活動との調和を図る」ということ、それは森林を含む自然環境資源の保全と持続的な利用により住民の貧困対策あるいは生計向上を図ることである。その上で、例えば REDD や AR-CDM といった枠組みに照らした事業を推進することになると理解している。当然のことながら、このような新たな枠組みや制度に伴い、必要な知見・技術を有した人材が必要となってくる。科学技術 ODA といったス

キームができたことも含め、今後、大学や民間企業といった開発パートナーが増え、多様性のある支援を途上国に対し実現できるよう協力をお願いしたい。

なお、本稿は筆者自身の考えを述べたものであり、必ずしも JICA の意見を代表しているものではないことを申し添えます。

〔参考文献〕 JICA (2008) JICA 自然環境保全課題別指針. JICA (2009) 途上国の自然環境のために、CSR 連携ガイドライン.

---

## 図書紹介

### フィールドワークからの国際協力

荒木徹也/井上 真編, 昭和堂, 269 頁, 2009 年, 2500 円

「海外の森林と林業」の読者諸兄の多くは、すでにフィールドワークを経験されていることと思う。フィールドワークに関する興味深い本を紹介させて頂きたい。

この本は、「躍動するフィールドワーク」(井上真編, 世界思想社, 2006) に続くフィールドワークの入門書という位置づけである。

入門書と言っても、アンケート調査やインタビューについての方法論を解説する、という種類のものではない。この本には、若手フィールドワーカーたちがフィールドと出会い、悪戦苦闘をし、成果をいかに国際協力と繋げていくか悩む、そうした私的な経験が包み隠さず書き記されている。読者は、先輩達のフィールドワークを追体験することに

よって、「敷居が高い」と言われがちなフィールドワークを少し身近に感じようになるだろう。そういう種類の入門書である。

詳しくは本書を読んで頂きたいが、詳らかにされる経験談の生々しさには圧倒される。フィールドワークにまつわる様々な体験は当然として、必ずしもフィールドでの活動・研究と直接的には関係しないことまでが語られる。それは、報告書からは決して窺い知ることが出来ない、「私小説的フィールドワーク」とでも呼ぶべき内容である。報告書の行間に隠された、私的な「物語」こそがフィールドワークの成果品であり、実はそこにこそ、フィールドワークと苦闘し、国際協力を結びつけるための煩悶を続けることになるきっかけと原動力があるのである。

編者・著者たちは言う、「よりよい世界への架け橋」としてフィールドワークに飛び込むのだ、と。もし、今誰かの顔が思い浮かんだのなら、一度本書を手にとってみてはいかがだろうか。(棚橋雄平)